



^ 13
2898
2



門 へ 13
號 2898
卷 2

文久二年戊七月迄江戸着

如瑞 瑞初

近世 雲晴間雙王傳第一集卷之二
新話

昭和九年七月四日 昭末

長喜 尾定 頁幸

第三回

告密譚 藤波災小遇ふ
太平二怒司 駄二郎罵る

東藩 宮田南北編次

さ系 程子 藤波の夢 歎 現 歎 幻 歎 心の内 生 憎 心 づ 云 び や ち も
あり 一 緯 共 白 地 云 我 身 猛 可 露 消 多 人 変 じ も 然
厭 べき 変 ぬ ね だ 簇 災 あ 人 嘆 嘆 中 の 悲 あり 然
く 此 変 色 々 々 数 多 人 の 命 と 取 ば 是 ぞ 大 有 罪 なる
非 除 此 身 八 裂 たり 悲 甚 苦 と 受 け も 千 万 人 の 命
か 思 へ 何 故 厭 べき 早 く 此 変 吾 夫 告 告 歎 と思 へ

又 三 傳 卷 之 二

無阿弥陀佛と合掌し参り。称名の声諸共今生の名残果敢を成行て黄泉の逆旅不趣きたり。維時天文十七年庚申の夏四月廿二日あり。享年五十三歳あり。時小巽呼鳴あり。藤波其性至て怜惻あして且慍柔ある夏万人ふすられ慈悲心深して人と恵み己と譲りく一度も怒の色と見せし夏なり。然れども因縁よろしく正芳を死と遂し夏造化ふ私せる欲又前因のありきゆへ其是ある欲非ある欲後人考へふべし。然れど其臨終ふ至つへは是あふおき往生あり。もや間休題字品曾古太平二助盛に此形骸と見よるも且愕き且怒り。憎き畜生奴欲所為ふ万民の命と取り此一郡と湖水とならんとならうのころころも妻の命と取り我ふ崇とせんわづら最憎べき曲夏なり。

見よく近きふ此恨と見よとまきありと罵り怒り。天神山の白眼つけ恰も狂氣のたくりあり。家内の者と残らず集へ下知と傳ふりや。今大夏緯急ふ成るのびくふわがが。まづ六七八ハ巽と轎ふのせ一刻も早く此地と逝のび根筋へ落行べし根筋の尼ヶ寄ふ藤波の舅も山北丹平と云へ人あり。此人もく世と去て今てハ藤波が弟あり。丹吾しりふ者王ころ。このゆりく山行通もわ六七八もよく知るる夏又四五六根助の両個ハ村の者少々計り將て藤波の屋と香花院へ昇りて行寺僧ふ夏の由と語り先假葬ふりすべし。緯濟て后改めて本葬と営べし。又其の者共ハ村中の莊卷等と入る。首里と堅固ふ守るべし。我ハ是より早馬あく自三木ふ馳行此由直

又長壽寺の事

小言として。御上様の威勢と有り。数千の列卒と催して。大神山と
 焼潰し。大蛇の切て兩段となり。莊客共の爲ふ災と拂ふべし。皆門
 委細心得くる。致早く准構とありねり。誰うあゝ馬ひけし。最を
 顔小下地とかなす。語の内小馬飼の兼て准構の粟毛の馬白泡と法
 せし。玄関の椽先迄ぞ引出せば。太平二の風立再び奴隷等小打向ひ汝
 達只今某が言付し。夏早々小准構とせざらや。怠りなせそ。やと。巽
 御身の早く六七八等と。振込へ落ねり。長居して。妖蛇の爲ふ獲
 擣る夏あゝ。我へ勿論死去し。母へ不孝と重る道理泣く居る所
 でなり。いそげやくと喚られ。皆唯々として。玄関迄送り出ると
 見向もやうに。馬ひいらりと打まうと。一鞭をれ。一黍ふ。三木乃方

へど馳て行跡ハ六七八巽と激し。やよ姫さまよ。いそ早く轎ふられんへり。
 可小御供仕り。尼ヶ寄ある母御の里迄送りと。け奉らん。いぎとくく
 と。いそと守と。巽へ涙ふせれあゝ。十六年の其間且夕小養育の恩と
 一日も送らざら。と斯淺間し。き死し。れ。せやく。此世の御恩報じ。香花
 院迄の件々小送り。まらん。此夏と赦せや。人々六七八刀祢と。母の尸小
 取付て。或ハ哭つ。或ハ口説く。あられさ。一方あり。ざり。る。衆人一同
 小諫て。云やう。この娘さるの。閔し。き。おれ。口。今。父。爺。の。云。し。言。遺。し。
 給ひ。と。早。く。も。り。す。れ。あ。ひ。と。う。く。と。長。居。あ。そ。が。又。災
 小遇給り。母御爺父へ。大不孝。夏。済。て。後。緩。と。香。花。院。へ。奉。り。と。と
 遅。と。云。ふ。侍。と。ま。う。と。此。大。変。の。最。中。ふ。と。雌。々。し。き。夏。か。の。と



井戸とまれば女は成すまじき
秘事白地藤清遇歿
我がまのいふにたはちまはる

有像第三

ひそそ急ぐ一立つ轎と早玄関へ昇まらんも罷も今云ふよ
 かかを恚ふかくと夜母の死骸ふいしまんを〜と。やう
 轎に乗るれば此隙ふ六七八の逆旅の准構と〜の〜。二人の奴隸
 小昇荷もせ路と早め〜。援刃へぞ急せ〜。其後四五六根助の二箇
 藤波が戸と棺擲の丹へ納めつ。年老るる莊客們小昇持せあつ〜
 香花院不行寺僧小恚々と談じ。假の葬りありおき〜。其後急て家
 小鐘と打鳴せん。瀧壱村の云不及辺村より追々集り來〜。太
 平二許と守〜。四五六根助ハ穉の次第と莊客共小云関せ。且又
 中へ旦那い〜。今朝より早馬あり。三木小鬼付。御上へ言上
 あされたまふ。暫間殿様より大勢と〜。天神山の大蛇と

征伐ありんハ必定あり。其時何れも達竹鐘の總先と磨〜。多年の
 と晴き〜。主の留守とて両箇ハ最り顔小示〜。関へ專ら太
 平二が消息と如何ありんと途中追々小人と出〜。其歸來と待
 詫り。却説岳曾古太平二ハ馬と早め〜。三木小鬼付。先大學小對
 面〜。大息統〜。其の次第と具小談〜。いふり〜。彼大蛇と早々小退治
 ありす。成珍事の出來人更も〜。願ふ御老臣這由と
 御上へ言達〜。と堰小堰〜。演々〜。蒲上大學是と関て驚
 夏大方ありす。その奔おき〜。かの大変りか。い〜。や諸共登城して。懸
 言上〜。と。猛可小衣服を改つ太平二を伴〜。御前へ出仕
 するが。太守よりハ四間〜。隔て太平二と平伏た〜。大蛇其

又五傳

御前の次小座と構へ頭を下て言上をかきやう。今回當家の御領なる。
加東郡三草郷天神山小島あやしき出沒不測の大蛇ありて。土居天
文元年より。忌々の夏ありて。彼所不能控ふる。畠曾古が妻ある藤波
夜前猛可小死去せし。緋の趣き遣りあり。具小言上か。く。別
所左京権亮長則朝臣様子とつくと。聞給ひ。太平二打向ひ。今大學子言
上の趣きいよく相違之なるや。言ふ。太平二頭と下げ。御談兼りい
あり。蒲上御老臣の言上の通り。一点も相違られあ。い。悲しや。加東一郡
と湖。あら。とて。老若男女數千人水庭の藻屑と相多。罪もあり。い。小
水責の責と蒙る夏あ。民の嘆。い。云もさ。あり。御上様も御領地。小
の付夏。小。き。あ。ず。願。い。早。々。小。大。蛇。と。御。退。治。あ。せ。れ。を。い。よ。

あき我等が幸亮あ。んと。面色土の。い。變。り。獐。く。く。い。く。言。語。
小。齟。齬。あ。る。夏。多。く。言。世。話。鋪。や。く。と。長。則。朝。臣。閔。濟。し。大。學。小。打。向。ひ。
や。よ。大。學。汝。は。是。よ。う。す。ぐ。小。五。百。人。の。列。卒。と。將。く。先。達。し。打。向。ひ。天。神。山
と。涉。獵。べ。い。畠。曾。古。太。平。二。一。刻。も。早。く。滝。野。村。小。立。上。り。二。十。一。ヶ。村。の
莊。客。と。集。め。先。手。小。進。ん。ぶ。案。内。せ。よ。予。も。明。曉。早。々。小。列。卒。等。と。引
く。出。陣。せ。べ。い。心。得。く。く。う。く。旨。示。せ。ば。二。人。謹。く。命。じ。受。く。ま。く。下
城。あ。り。く。り。く。り。太。平。二。其。上。り。も。万。端。蒲。上。小。頼。あ。き。其。身。ハ。再。び。馬。小
行。の。り。飛。が。ど。く。小。滝。野。と。さ。し。て。帰。り。く。が。是。時。既。小。未。の。時。也。
六。根。助。等。ハ。出。向。ひ。小。腰。と。龜。く。や。ま。う。異。さ。ぬ。ハ。既。小。早。六。七。八。等。小。御
供。して。尼。ヶ。寄。へ。行。給。へ。り。其。上。り。吾。濟。等。大。勢。よ。り。奥。と。ぬ。ハ。香。奉。

又玉傳...

ハ後日の政道の妨と相成へき度必定。今既申の刻より一時近
遅められり。早々召來り。入囚付べきこと。下知する半頃へ
駈二部ハ汗ふ成て馳來り。人と押分向う出づ地不跪く頭と下げ。
曾寧村の司駈二部延引あがり只今やうく泰りいと畏れ入る
有様小諸人驚く是と見ると歳正十余り六年。容貌美ふしく
溢る如く。玉の顔雪肌脱黒髪荆不乱とれり。笑つ見上る。
顔ハさあがり海棠の雨と帯する風情あり。草弥深き田舎の人ふ
かゝる美少年もあるもの欽古の在五中將。唐山より潘安が花貌も
あきく是れあまき。女も見ると思ふ計りの美少年也
見る人毎驚き見とれり。暫く鳴も静まらるる。品曾古太

平二是と見く。大山怒く下知とあ。召擣ヤツト喚われ。司駈二部ハ
涙と流く。吾汝元より上様と蔑ふ。あはれず。先一通り聞て
吾先考司馬六主ハ七歳先死せり。一箇の母仕へし母ハ持病乃
瘡あり。何日と息災する日ハ早あり。然し一昨日の朝より
して。猛可瘡のやう誥く。憂苦日頃十倍。此も柔く時之
あ。吾只御側付添へ。不及か。心一そい。首病あせり。情
なや。薬も力も其功見へ。苦く給ふと見る悲しき。一昨日の
夜も昨日の夜も一目も眠付りせ。力と盡せし。今の今追
さる。一点計も機嫌と見む。然る先程莊官様よりのきび
しき。迴文來り。准構を。て早來ねと組頭。田舎よ。其内

又二傳

年老心の正直鋪者と二箇で選

より觸來まがりその大變の起りて行

出し是と五人組頭いり

より御咎蒙らん然りとして母の病苦と他所に見たりて出行

の心かくアひいふ何とと人と傭人と。那是と尋迴れど情あや

此日の村中一統も備へき人さうなかり。今いせんも無まみ

母ふ此更聞へあげ。軒隣ある嬬の老婆と。傭も今宵乃看病

のめ。行人とまると母上へやよ待暫く下み居よ。言更ありや

止らるゆへ何更やうんと座ふ直りしを。其時母の枕邊ある。手

笈とやと引寄こ。繕解と内よりして。吾濟が年月支干まで。

書あつたる守り袋。些ぢりり因縁あるべき東西と。取出しつ

吾ふ与へ且遺言してや。病老くる吾自あくる。愆云内も

黄泉の逆旅子。行かん更のさうりか。此身なうらん其跡て必

む深く嘆あが。て足下が身も病あど起さば却て黄泉の障り

の。つふあるごう。此外の遺置支とて。さうの一点あぢもあき這

船と。心懸む早速。莊官様へ行ね。と涙あがりり。と溢さき。

其悲しき胸と割腸と断よりも。立ちのみよくと泣と母刀自の

頻み苛ち。その女々しく男子に似げあ。御身も元の武士の兒を

愆言はして今宵の丹も死み究り。と。更あらんや。御身が帰

る近め内も必も病氣平癒して。楽嬉待人早行むや。と激され

ても親と子供恩愛互に棄が。思はず知らば一時余り。遅へ吾

濟が罪あまども。此義と洞查く。とされと罪とゆるさせ給ね。



大平二



四五六

一六下

らんを志のーたいていそこひの中ふと
くま折をいとそまあるをす桂男の
示権 曾古罵 天矢夫
着の俗はれり綿と名見世

又主傳新之二

と涙ぐんぐん有さぬ。いよ、藺蘭花結まじく。露と帯くる風情
 みく。いぢくしきもまき美しき。顔み見られく苦り切くる。
 太平二も今更と思ひ怒りの声さまの梢おられると早くもす
 いせ。近隣ある莊客共一度ふ訛言として云や。此司駄二郎の幼
 少より。父母ふ仕、最孝あり。世ふ傳くる少年へ倒御上茂ふせぬ
 へ彼がやより。平日行跡を以てその實心と知るふ足れり。願ふ
 御且那様の仁心ゆゑ。今日の誤へ御宥免と願たすまらるゝ異口
 同音ふ驚々としやとふぞ。太平二是ぞよき汝と思ひふれば打
 頃まで汝達云ふ相違あり。彼實ふ母の為ふ看病と盡せしめふ遅
 泰せしと云あは。是孝子女道あり。今更深く咎ふそのようかき

ふ似くるべき致。依之先今日罪一全ふ免まじく。さうは是より天神山
 へ發向け准構まじく。誰しもあま足の速き者の道迄出て三木戻より。
 列卒の來ると遠見せよ。又开它の者共。繩と以て網と作り。山の麓
 小張よう。早速々と急ぐ。其身も馬ふひらりと飛乗
 了前門迫衆出。蒲上が列卒の出來ると。今やくと待てるなり
 太平。今司駄二郎と心安く赦せん是又
 彼が心ふゆの有度こそこの巻あり

第四回 忠邦神射大蛇と殺す

此時半途迄遠見ふ出せ。土兵共追々ふ馳うへり。今三木の方より
 しく。長臣様の御勢と見九五六百人むらり。此方とさして泰り

又玉傳卷之二

〇十一

い。アレ見給へ早あめ山と打越しつらと。云ふ太平二馬上より。
 遙ふ向ふの方と見るふ是ど浦上が勢と見へく。弓鎗長刀ホい
 ひーと立つの。真先之唐團扇の纏と立らり。太平二急り馬
 ようゆり。徒歩して半途迄出向ひ。莊官岳曾古太平二出迎ひと。
 云ふ浦上へ馬上より。長揖して是と勞ひ進んぐ岳曾古太平二。門
 前ふ来りく。太平二自諸卒と勞ひ食酒と出して饗應やどふ。
 此間ふ大學へ太平二が家ふ入り。天神山の様子聞正し。扱再馬ふ打乗
 り。太平二と案内者ら。列卒莊客と跡ふ將く。天神山ふ發向し。
 太平二下知して莊客共ふ山の四面ふ繩と張り。兎角とらり竹其日も
 既ふ曉と報る時ふなりぬ。浦上下知してヤヤ。今宵へ此所ふ野

陣して四方ふ箒とまき焚き夜の丑ふ兵糧遣ひ曉方より
 入るべし。尤猪鹿狐兔の類と。て助るこめく。凡目ふ遮る
 物小蛇魚鳥ふ至るまで悉く討取べし。是ど無益の殺生と好んで
 斯とらる変あしむ。神変不測の怪蛇めは。小蛇なごふ身と変し。
 逃去まゆやあし人諸卒ら此義と心得く。力と盡して涉獵
 べしと嚴ふ命と傳へく。其夜を野陣ふ宿く。明るへ天文
 十七年其四月廿四日。天神山の四方より。諸声あげく狩上る。
 中ふ岳曾古太平二へ。今日ど妻なご藤波が敵と取んと
 真先づけ。勇むこめく諸卒と下知して麓の方より上り行
 と争く娘と取らる。者我子の敵と取らんと勇氣日頃る

させ給へし媚と含むぐ中上と云ふ。浦上大學。魚頭て其義も其心
 得られど只何處と目當とする所ありと當惑せん。知らず殿様
 の御賢察兼度いへしと浦上が言ふ長則朝臣打あて笑て中上れ
 くる先。ううして汝達が議論具不問されども。予も今更不憚る
 べ。知るべきと云ふ。緯の術をなんぞ出し得んや。然らざるも是首一ツの
 論あり。夫蛇の神物。昇騰して龍とある。変化固より強なり。上古
 の人云夏あり。大蛇千歳年と経べ年立復の節と俟分界して雨を
 行是と号て分竜と云ふ。即四月の末立復の節即其時不當を。俗達あ
 ことあこと見よ。遥向の深山より。細然として水氣昇る。大蛇必とあれなり
 洞ふ潜りあんと疑は此也。水氣昇る。是首と涉獵。大蛇の棲巢と知

夏あらしんと宜バ太平ニヌヤヤ。臣們先よりア。ある波も。數回
 涉獵い。然らばも曾て怪しき夏なり。却ては得共彼谷ふハ
 尤ある夏決して相見へいらし守。再御賢慮賜るべし。と云バ國
 司ハ打笑あぐ。一通りハ涉獵てハ如思ふハ理りなるも。とも
 是より元來術あり。犬羊猫の血鮮と。所々ハ海と。又柴焚木
 の焼草と。准構なり。満谷一面ハ焚立あ。大蛇のつある術あり
 共身と何處より隠し得ん。其時射術不名と得し者ハ。曇目
 の法ゆ。射さ。あ。大蛇と得人夏難る。予豫而此夏と
 精せ。中上出陣の折當時予が御作不於て。射術不す。くれ
 且忠ある。名古十郎忠邦と喚勇士一箇召具し。來れり。只今

又正傳卷之二

〇五

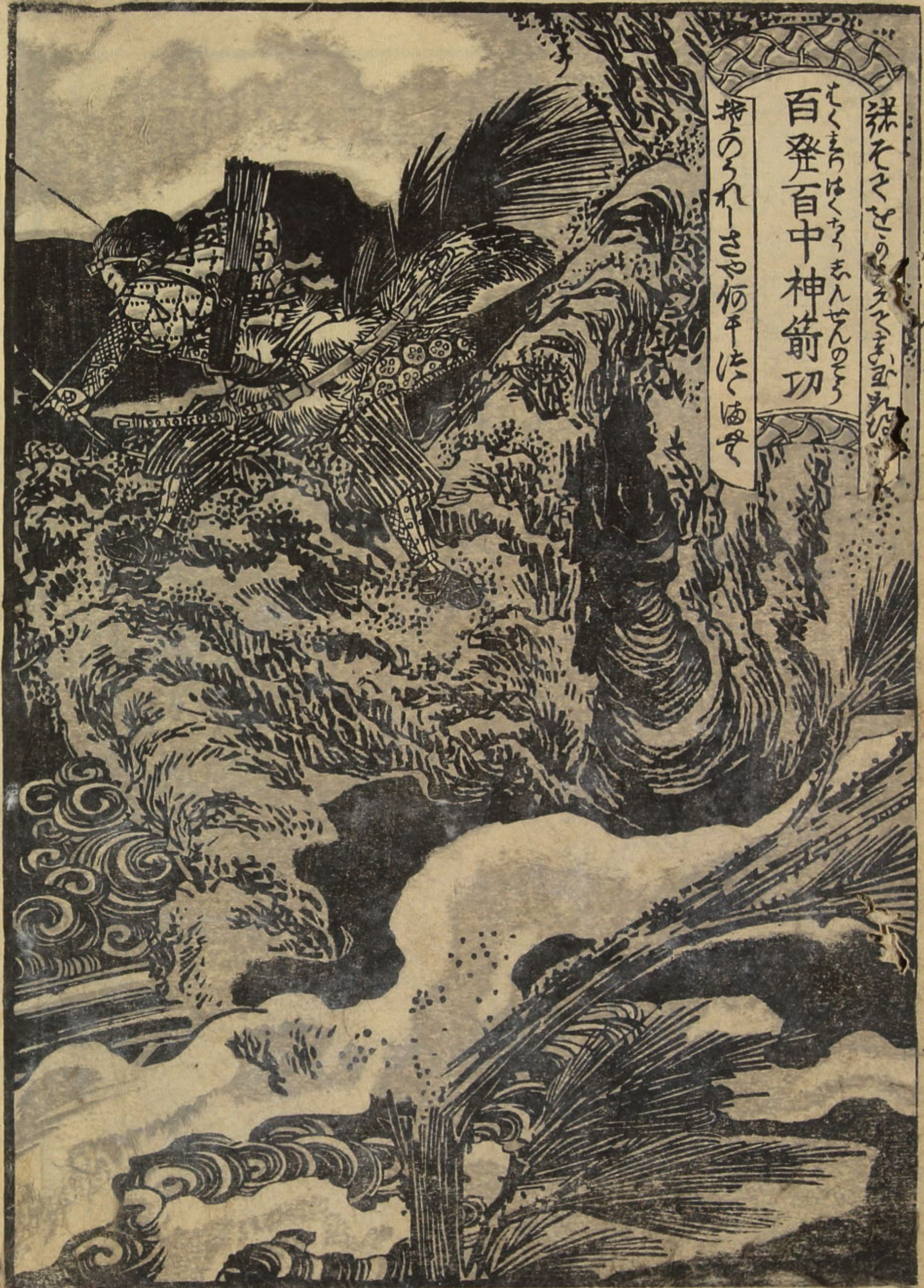
予が云く通り早々准構とあすべしと。明智も長く國司の
一言蒲上ととどめ並居る近臣。通賢察恐入奉りいふと点頭
感動暫く止ざりたり。時ふ此名古十郎忠邦と云武士の三木の
藩中あり弟一の弓の名入今茲齡四十小盈く兼ふ忠義無双乃
士一貫の禄と拜して長臣の末座ふ双び妻の袖篠と云く
其性曾て柔なり顔むせも又艶ふして武藝ハ男子ふ方ざり
たり。此日辰十郎ハ主命あり。拜候せざらば。将装束より身と
圍り家傳墓目の弓箭と携へ大殿の跡方小控て居り。蒲上大
學連形へ下知と傳へ。莊客侶ハ牛犬猫の鮮血其外穢くも三
物と集へさせ山上より谷へ洒ぐ。又列卒小下知とたり。尋く新

焼草と山の如く小積上。一齊ふ火と放せば。火焰谷中ハ遍滿見
る。一山烟ふ埋れ臭き匂ハ鼻と穿ち。是や未見の焦熱地獄。大
焦熱も恁やんと見る者膽と冷して。駭然くすと云変なり。
名古十郎忠邦ハ適妖蛇の出よう。只一射やとてわれんと。鼓乃
場所ハ只一箇弓箭携立出つ。墓目と定り待所ハ長則朝臣の推察ふ
たぐへま忽谷中鳴る。其音百千の雷の一同響く。びびり
みく。一朵の黒雲地より起り。凡身の長三丈計り。環り四尺なり
ある。大蛇忽然と頭れ出。兩眼百練の鏡の如く。口の中より火炎や
吐空とのぼんで。遊人とする。とまると見ると。名古十郎強
引満月の如く引去り。南無正八幡大菩薩と心念して。お

射るふ其箭不誤大蛇の耳原へグサとさう其時大蛇大
ひみ怒り火炎のぞり口とクワツと開き只一口とや思ひらん
忠邦目づけ飛くるると心得と忠邦ハ二の箭又く丁と
射るふ這回へ口射込んぐ喉へのぶく射付とり長則朝臣是と
見給ひ射とりや射とり列卒の面々鬼れや鬼と下知し給
ハ速雄士二百余名一斉小箭と放せば其烈き雪の飛ぶ如く
妖蛇が身うら叢毛のてく透間ぬちちるるるさ一の猛蛇も堪
る鱗と張る躰と闊へ口より青き泡と出し品ふる樹木茂
倒して忽ち息絶果たりされども陰氣のなすゆふや山は鳴
夏頻りふして黒雲のまぐ谷間と放れむ怪風づくともあ

吹とる毛髪を寒うとちり須更とちりやうと風も止
山の鳴も絶みらるると不側あは此時も列卒共は猶燃る火
と打消して蟠り死する妖大蛇と大繩のつ所胴尾等と楚
と拾り國司の御前へ引持來るる莊客共群り寄我一見んと
さると大學下知して寄付を殿の實檢濟さる内汝們近よると
勿きとききび制する其内長則朝臣ハ將机と放れ扇子と
開く大小名古う功と讃し汝へ誠ふ古の源三位頼政とさふも
るまに予み蒲昌の前無き是非あり思賞他日ふ汝汰まじ
と感悦おのちをうらう十郎大平伏し臣常ふ君乃
祿と食少の功にあやして御讚の辭いと恐引く恩

又玉傳卷之三



謀そぞの
こくまはくちんせん
百登百中神箭功
持のれいさ何平はくほせ

賞ふおひくくやと身と高ぶるぬ忠信義胆閑者心裡小讚美
 々り長則朝臣へ開くる扇と口ふ當あつ間述くよつ小腰を
 亀や大蛇とトソクと見そなうす小鱗のまごつ紫うしてそふ角の
 鹿ふ似くり頭へ駝ふ似く眼へ鬼のく項へ蛇ふ似く腹へ辰虫
 ふ似くり爪へ鷹のく掌へ虎の如く其耳へ牛ふ似く鱗へま
 う魚のく。鈕のくを背鰭へ鯛ふ似て勢へ猶生ふ似く
 長則朝臣ハ左右と見つり汝達是と何く見くる。こは大蛇と
 云あつ。其勢ひハ龍ふ似く。九似三停よくくらひ。
 喉の耳掌尋常の大蛇と異なり夫龍蛇の靈くるや照る
 近く頭れ隠るくして深く潜む龍蛇ハ真ふ鱗虫の長くこのゆへ

ハ周公姫且易とつくま龍とく聖人ハ比く然れども龍蛇ハ彼
 あり聖人の無欲ふあつ。あつ人或ハ是と取或ハ抑或ハ屠今ハ
 其術傳る者あり。凡雨と初る者必まづ是と誦ま。あつ人ハ龍
 と号く。雨ユと云又雨師といふ昔素戔嗚尊ハ稲田姫の爲ハ頭
 の龍と平とまへり。今此蛇ハ喉の下ハ長短尺の所あり。こを逆
 鱗と号く。物有く是ハ中ねハ怒らざと云夏あり。故ハ天子の
 怒り給ふと逆鱗とす。雄龍の鳴時ハ上ハ風あり。雌龍の鳴時ハ下
 ハ風吹其鳴声笛と吹ふ似く。今此大蛇ハより察するふ必も頭ハ
 名玉あり。誰欽是と開き見よやと。仰ふ近侍の士畏い。ハ
 九人計り立集い刀とめて割んとす。其固き貞勇ふ似く

又江傳卷之三

長則朝臣宜ふやう。汝達知らずや大蛇の頭ハ其堅更鐵ハ似たり。只
 耳の後ふの柔るる。所有物之名古十郎是と知く。初の箭ハ耳の後
 と射く。其箭あつと射込ぐ。徐達是首より刀と入ハ
 心易く割得べし。心得る。欵と宜ふ。畏りひと。即耳の後
 より難あ。頭と割裂る。時ハ不測や頭より。光輝四下り
 散徹して。一ツの名玉轉出る。方ニ寸計り。其形圓あり。
 玉中一点の疵なき。白き夏水昌の。玲瓏ハ内ハ宮殿の
 形あり。其鮮ある。夏正ハ月宮と画ハ似たり。晝ハ光り見む。や
 之とも。闇ハ置ハ光明散然と。秦王ガ十五城ハ替人と云。趙の
 壁より。勝るとも劣べう。奇ハ奇くと長則朝臣右手り

拿くハ又死手へ遷る。回ハ新賢。又大學ハ打向ハ昔唐山の薩候
 と云。入蛇の命と助る。報恩ハ其蛇一顆の壁と舍來く。薩候ハ
 送る。云ハ即夜光の名玉。又梵書ハ。下和といふ。人
 荆山の麓より。得る所。璞とも云傳ふ。其兔まれ角まれ。
 かる。奇妙名玉の手ハ入。予ガ嬉し。今より家の室とせ
 ん。袍の袖ハ包。自右手ハ捧。再將机ハ。給ハ蒲上
 大學大ハ讚。かる名玉の御手ハ入。福祖御子孫ハ傳ふ
 べき。前兆ハ。是ハ唐山傳國の玉璽とも云。一
 恐悦々。媚と。同。あ。座。居。長則朝臣
 下知。給。恁。次蛇と野外ハ捨。後來の程より

かるまじ。此所埋る塚と築き紫龍崗と号くべし。大學此儀
 と莊客共ふ。中へ入るとてさうらふへし。仰ふまじと大學の莊
 客等も命じつ。大ある穴とありせ。大蛇と切つ二段とありし。
 穴も埋りし。其上も大ある塚と築くせらり。此時既ふ未の刻に
 成りし。還御せしと呼り。行列の列卒美々しく隊へ此日
 の獲東西猪狽狐兎のたぐひ數百疋昇荷せ直ふ三木へ御帰城ある。
 第一番の別所長則朝臣二番へ長臣浦上大學。別所圖書三宅遠
 平一等。三番へ列卒の者共引下りて岳曾古太平二莊客侶と
 引從へ天神山と下り行。そこ中曾寧村ある。司駄二郎はつと
 ちる人諸人ふ道とゆくれ。獨り太蛇と埋る。紫龍崗のむらり

と行過んとせし。處も猛可後ふ声ありて。司駄二郎暫く待ねと喚
 声ふ愕て思ひを後とらり。見まじもさうらふ人うげなりし。
 ちの吾耳の誤りあり。我と喚しや思ひありんと。又行過ん
 せし。司駄二郎司駄二郎と二声三声喚けり。畢竟是何
 者ありや。とん三の卷の始ふ説と聞ねり。

近世 新話 雲晴間雙玉傳第一集卷之二

抄本

